
パクの恋愛修行

松下日葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パクの恋愛修行

【Zコード】

Z2360Z

【作者名】

松下日葵

【あらすじ】

犬のパクが『私』の恋愛に口出しをする
超迷惑ストーリー？

「あたつてくだける。」

くだけてどうする、と突っ込んでしまったくなるような誰もが一度は聞いたことがある何の変哲もない言葉。

それでも私にとつてはかけがえのない言葉だ。

何しろ飼い犬のパクが私に放った言葉だからかけがえのない、ある以前に強烈に印象に残っているのだ。

パクが言葉を喋ったときはまず腰が抜けた。

次に口が閉まらなくなつた。

次に口の中の唾液腺が機能停止して口がからつからに乾いて言葉が出なくなつた。

「ここは奇跡の犬を飼つてしまつたと割り切るべきなのか。それとも丁重にドッグショップに犬を返すべきなのか。」

「割り切れ。割り切れば未来に光が見えるぞ。」

何だかわけのわからぬ説得に無理やり納得させられた私はドッグシヨップ返還の道をやめた。

ただこの犬…

喋れるくせに

普段ほとんど喋らないのである

「なにか喋つてよ。パクさーん。」

しかしパクは知らんぷり。

そんなパクの憎たらしい態度に対して怒りといつよりは何をしたら喋るのかという好奇心からパクにひたすライタズラをし始めた。

肉球をひたすらさわり続ける

尻尾を握りしめる

散歩に連れて行かない

両耳を左右に引っ張る

風呂嫌いな犬を「ゴシゴシ洗う

今考えてみればこれはイタズラでは無いような気がする。
ただじやれてるだけに過ぎなかつた。

まあそれはさておき、何をしても一向に喋る気配がないので私は諦めることにした。

私だつていつまでも犬と戯れているほど暇じやない。

なにしの…

私は今「恋」をしてくる。

王道といわれてしまえばそれはそれでいいが、恋のお相手は勤め先の上司である。

私は今年で24歳になりお相手の男性は26歳。
何かと気が合つて会話がよく弾む。
話してこんなに楽しいと思えた男性は初めてだつた。
昨日をする勇気が出ない自分がもどかしかつた。

そんなことを考えていた
ある日

「山野。ちょっと話があるんだけど、時間あるか。」

山野とは私の名前。

恋のお相手からの突然の呼び出し。

「あ、あ、あ、はい。」

「実は俺…恋人ができたんだ。」

私の期待メーカーがゼロまでガコンと下がった。

「俺ももう26だし。そろそろ真剣に結婚を考えたいと思ってて…。」

期待メーカーがゼロをきつた。

「こんなこと相談できるのも山野ぐらいしかいなくて……。どれく

らいのタイミングでプロポーズすればいいのだろうか。」

「はははは早めの方がいいいと思いますよ…はい。」

何言つてるんだろう自分はと思いつつも他に言葉は出てこなかつた。
「やっぱりそうだよな…。ありがとう山野。決心がついた。本当に
ありがとう。」

なぜ自分の好きな人の恋愛話に付き合われ感謝までされているの
だろうか…。

私の心中には無常感が渦巻いていた。

「はあ…。」

失恋のやけ酒でもしようかと思ったがそんな気持ちにすらもなれず
ふらふらと家に帰ってきた。玄関で靴を脱いでいるとパクが私にす
り寄ってきた。

その瞬間私の目から大粒の涙がこぼれ落ちて止まらなくなつた。

「バカみたい。告白もしてないくせに勝手に一人失恋して落ち込ん

で泣いて……。」

パクは尻尾をパタパタと振つて返事した。

「泣くな。」

「へ?」

何をしても喋らなかつたパクが急に口を開いた。

「泣くなと言つているんだ。」「でも……。」

「俺はお前の恋の神様だ。喋らせようとして随分ひどい仕打ちをしてくれたじゃないか。」

私は唖然とした。

当然だ。恋の神様と言われて「はい。そうですか」と言つ奴は世界に一握りだろう。というか一握りもいるのかどうかとこいつ点でまず疑問だが……。

「俺はご主人が恋の悩みを抱えているときにしか喋らない。というか喋れない。」

「まあ素敵。つてんなわけあるか!」

「立ち直り早いな。」

「あ……そうだった。つて何をしているんだ私は……。」

私はガクンと玄関に倒れ込んだ。

「あたつてくだける。」

「やだ。くだけたくない。くだけたら死んじやう。」

「何もしないのか。」

パクの冷たい一言に私は目を見開いた。

「何もして無くなんかない……。」

「山野……。確かにお前は今不利な立場にいる。でもそれを不利な立場かそうでないかを考えるのはお前次第だ。」

今更の紹介になるがパクは柴犬だ。

もともと凜々しい顔をしているパクがさらに凜々しく見えた。

「傷つきたくない。傷つけたくない。そんな気持ちを持つてゐぐらいなら恋なんてするな。恋を甘くみるな。自分の甘さに甘えようとするな。」

ズタボロに言われている私。でも正論だつた。何も言い返せなかつた。だから答えはひとつしかなかつた。

「言えばいいんでしょ、言えばーー！」

この際どんな手を使つても略奪愛をしてやがつと心に誓つた。

翌日。

会社に着くとなんだかにぎやかでいつもみたいな落ち着きがなかつた。

「ねえ。どうしたの？ 何かあつた？」

同期の社員にそう尋ねた。

「葉桜さん結婚するんだつて。付き合つて一週間で見事『ゴールイン！おめでとう』って盛り上がつてたの。」

葉桜さん

葉桜さん

葉桜さん……

まぎれもなく私の恋の相手の名前だった。

結婚？

『ゴールイン？

一週間？

信じられない単語ばかりで私は混乱に陥つた。

「相手は世界有数の証券会社の社長の『令嬢だつたんたんだつて。

早い結婚を迫られてたらしい。もともと私の入る隙間なんてなかつた。」

新入社員のくせに朝通勤してたつた一時間で早退。

家に帰つてくるなりスースのままでソファーに倒れ込み、近寄つてきたパクに愚痴をこぼした。

「それは災難だつたな。まあ氣の済むまで落ちこむがよい。」

「言つことが毎日違うのね……。」

「（）主人の毎日の様子に呑わせたアドバイスをしていろのだ。文句を言つな。」

私は思わず吹き出した。

理不尽な犬だと思いながらも感謝の意を込めてパクの頭をなでた。

「パクがいるから頑張てるんだろうな……私。」

「俺はお前のその言葉が聞けるだけで満足だ。」

やつぱり憎たらしき犬だと小走りつぶやいて目を閉じた。

起きたらちやんと会社に行け……

そしてちやんと葉桜さんと言つんだ……

おはよ（）あります、つて……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2360n/>

パクの恋愛修行

2011年10月7日21時44分発行